

まえがき

武士という存在は、世界史上に類例のない美的精神像として世界の人々から称讃され、サムライとかハラキリという言葉は世界語として広く知られています。

昔、武家に生まれた者は幼時から、男子なら男道としての武士道を、女子なら女道としての婦道を厳しく仕込まれました。武家の子なら、男でも女でも七歳になれば切腹の稽古を始めるのもその一環です。武家の子が始める最初の稽古が切腹の法であることは、武士道あるいは婦道を考える場合、大変象徴的といわねばなりません。武家に生まれた者は男女を問わず、美しく生き、美しく死ぬことを宿命づけられていたのです。

本書ではこのうち、武家の女性の生き方を決定づけた婦道を主題としますが、江戸時代の儒家・貝原益軒の書『和俗童子訓』の巻之五「女子を教ゆる法」や、それを基に編纂されたといわれる『女大学』などは、婦道を女性が厳守すべき最高の美德としており、婦道を実践することによって、武家の女性は武士に遜色のない凛乎とした美しい生き方ができるとされたのです。

事実、婦道を実践した武家の女性の美しさというものは筆舌に尽くし難いもの

があり、日本史が世界に誇り得る要素の一つに、この武家の女性の凛とした美しさがあるといっても過言ではありませぬ。たとえば武家の女性は、男から一步も二歩も身を引いて、常に男を立てながらも、決して無批判に男に隷属、屈従するのではなく、控えめな中にも凛とした風儀をくずさず、言葉使いも物静かな中にさりりとした威儀がありました。これが婦道美といわれるものなのです。

また婦道の解説書である『女大学』に、「女は容よりも心の勝れるを善しとすべし」とありますが、武家の女性は外見的な見た目の美しさよりも、心映えのよろしさをもって至高の美德としたのです。いかに容姿抜群の美女であろうとも、心映えの下劣な女性は婦道不嗜みとして一人前の女性とはみなされなかつたのです。

また武家の女性は静かで控えめであるとともに、情深い優しさを持たねばならぬとされました。ただこの優しさは誰にでも当たり触わりなく接して波風を起さぬというような甘い優しさではありません。真の優しさとは厳しさに裏打ちされていなければならず、厳しさは正しさに裏打ちされていなければならず、さらにその正しさは強さに裏打ちされていなければなりません。真の優しさとはこういうものであり、この優しさを血肉とするためには、自分自身が誰よりも清潔でなければならぬとされたのです。

いわば婦道とは、このように凛々しい女の道を守ることにはほかならず、換言すれば婦道はそれ自体が美の結晶体ともいえるのです。それゆえ『女大学』には、「たとい命を失うとも、心を金石のごとくに堅くして、義を守るべし」といった武士道にも見まがう凛烈な言葉も出てきて、婦道美というものが武士道美と本質的には異なるどころがないとされているのです。

それゆえ婦道も武士道同様に「潔さ」を重視しました。やるとなれば断乎としてやるというのが婦道の眼目であり、この潔さという美德が武家の女性の精神像というものをなお一層美しいものとしたのです。

この美学を知れば、封建時代の武家の女性が常に男の言いなりになって屈従を強いられる哀れな存在であった、などという皮相な把握の仕方は、封建制という先入観念に捉われた浅薄な見方に過ぎないということがよく分かります。これは本書の第一章「潔く生きた女性たち」を読めば一目瞭然で、彼女たちはまさに武士顔負けの断乎とした潔さを發揮して、婦道の何たるかを後世に知らしめたのです。

本書には百人近くの武家女性が登場しますが、いずれも見事な婦道の実践者であり、彼女たちの凛とした生き方の美しさが、日本女性の美学の根本を作りあげたといってもよいでしょう。そして彼女たちが時に見せる断乎とした潔い生き方

は、混迷の度を増す社会をなお一層力強く生き抜いてゆかねばならぬ我々現代人に、揺るぎない指針を与えてくれるに違いありません。

北影雄幸